

対人葛藤場面における幼児の謝罪行動と親密性の関連

中川 美和* 山崎 晃*

本研究の目的は、幼児の謝罪行動を道具的謝罪と真の謝罪の2種類に分け、謝罪の種類と親密性との関連を検討することであった。対象児は4歳児(N=60)、5歳児(N=65)、および6歳児(N=63)であった。分析の結果、親密性が謝罪の種類に影響を及ぼすのは6歳児になってからであることが示された。すなわち、4歳児は、親密性の高い相手に対しては道具的謝罪を用いるが、6歳児になると親密性の低い相手には道具的謝罪を、高い相手には真の謝罪を行うことが明らかとなった。また、親密性の異なる相手に対して、幼児は謝罪後の人間関係を考慮した上で謝罪を行っているのか、またその際、どちらの謝罪を用いるかについて検討した。その結果、4歳児も6歳児も謝罪後の被害者との関係維持を考慮して謝罪を行うが、その際、4歳児は親密性の高い相手には道具的謝罪を用いるが、6歳児は親密性の低い相手には道具的謝罪を、高い相手には真の謝罪を用いることが示された。

キーワード：道具的謝罪、真の謝罪、親密性、幼児

問題と目的

対人葛藤場面では、加害者は被害者に対して弁解、正当化、謝罪など、様々な方略を用いる。中でも、謝罪行動は加害者が最も頻繁に用いる方略であり(Gonzales, Pederson, Manning, & Wetter, 1990)、対人葛藤を円滑に終結させる上で非常に有効な方略である。加害者の謝罪は、被害者の抱く攻撃的感情を緩和するだけでなく(Ohbuchi, Kameda, & Agarie, 1989)、違反によって生じた加害者のネガティブな印象を改善し(Darby & Schlenker, 1989)、また科せられる罰を軽減することができる(Darby & Schlenker, 1982)。教室で生じた対人葛藤を簡潔に終結させるために謝罪行動が奨励されていることから(Browning, Davis, & Resta, 2000)、謝罪行動は問題解決方略の中でも非常に有効な方略であるといえる。

さて、謝罪の構成要素は近年多くの研究で明らかにされてきているが(e.g., Tedeschi & Reiss, 1981; Petrucci, 2002)、とりわけ、責任の受容と罪悪感の認識は欠くことのできない重要な構成要素である。被害者に対する罪悪感を認識するには、自らが加害者であることを認識し違反などの行為に対する責任を受け入れることが前提となる。罪悪感の認識の徴候は2、3歳頃には見られるようになるが(Eisenberg, 2000; Barrett, 1998; Lewis, 1998)、幼児の対人葛藤場面を観察しても、彼らが用いる謝罪の全てに責任の受容や罪悪感の認識が含

まれているとは考え難い。例えば、被害者や周囲の子どもが保育者に介入を求めた直後に慌てて行われる謝罪や、遊び仲間から排除することを示唆された後に行われる謝罪には、責任の受容や罪悪感の認識というよりはむしろ、罰への脅威という要因が強く働いていると考えられる。Itoi, Ohbuchi, & Fukuno (1996)によると、罰は謝罪を引き出す上で重要な役割を担っており、保育者や養育者という権威的存在を身近に持つ幼児は、罰を回避するために道具的に謝罪を用いることが少なくない。本研究では、罰の回避のように、何らかの目的を達成するために行われる謝罪を道具的謝罪、一方、責任を受容し、罪悪感を認識した上で行われる謝罪を真の謝罪と定義する。

この2つの謝罪は、どちらもが同じように被害者から高い評価を受けるとは限らない。責任の受容や罪悪感の認識が必要とされるのは真の謝罪のみであることから、これらの要素を含まない道具的謝罪は謝罪として評価されにくい(Tavuchis, 1991)。McCullough, Rachal, Sandage, Worthington, Brown, & Hight (1998)は、謝罪を行った加害者は、被害者から共感を得ることができ許容されるに至ると報告しているが、この見解は真の謝罪にのみ通じるものであると考えられる。なぜなら、道具的謝罪を行った加害者は、謝罪を行わない加害者に比べると高い評価は受けるかもしれないが(Wellman, Larkey, & Somerville, 1979)、違反に対する責任を受容していない以上、被害者の怒りを緩和することは難しく、結果として被害者との関係が悪化する可能性も考えられるからである。対人葛藤に対

* 広島大学大学院教育学研究科
miwa@hiroshima-u.ac.jp (中川)

する教師の介入が多く見られる幼児期は(加用, 1981), 教師の介入などを通して真の謝罪の重要性を学ぶ最適の時期であるといえる。道具的謝罪ではなく真の謝罪を行うよう教師が幼児を導くためには, どのような状況において道具的謝罪もしくは真の謝罪が用いられるかを明確にしておかなくてはならない。つまり, 幼児がどのような情報を手掛かりに, 用いる謝罪の種類を決定しているかを明らかにしておく必要がある。

では, 幼児はどのような情報に基づいて謝罪を使い分けるのであろうか。加害者の謝罪に影響する要因の1つに違反行動の特性がある。違反が意図的になされたものであるか, また被害の程度がどのくらいであるかなどの違反状況の特性は謝罪行動に影響する(Schlenker & Darby, 1981; Darby & Schlenker, 1982; Darby & Schlenker, 1989)。しかしながらそれ以上に, 被害者との関係性が幼児の謝罪に与える影響は大きい。中でも, 対人葛藤当事者の親密性が, 彼らの用いる方略に与える影響は大きく(山本, 1995b), 従来の謝罪研究でも, 謝罪に影響する要因として親密性が取り上げられている。Fukuno & Ohbuchi (1998) は, 違反を犯した加害者がとる行動として, 謝罪, 弁明, 正当化, 拒絶を取り上げ, これらの中でも特に謝罪と弁明は, 加害者と被害者との親密性が高いときに好まれる行動であることを示した。このことから, 謝罪や弁明が親しい他者との人間関係を維持するために用いられることが示唆される。対人葛藤場面を含め, 子ども同士の相互作用において親密性は重要な役割を果たしており(Doyle, Connolly, & Rivest, 1980), 対人間で違反を犯した際, 被害者との親密性は, 違反後の加害者の行動を大きく左右すると思われる。そこで本研究では, 親密性と謝罪行動との関連を検討することにする。

ところで, 対人葛藤場面についての研究の多くは, 当事者が用いる問題解決方略のみに焦点を当ててきたが, 方略が有効であったかを検討するためには方略を行使した後の当事者間の人間関係に着目しなくてはならない。なぜなら, 当事者間に何らかのわだかまりが残る場合, 当事者同士が1つの遊びを共有することが困難になる可能性が高く, このような事態を回避するためには問題解決方略を用いる際に加害者が被害者との人間関係についてどのように考えているかを明らかにしておかなくてはならないからである。加害者が謝罪後の人間関係をどのように捉えており, その際どのような種類の謝罪を用いるかを検討することによって, 各謝罪が加害者の心理的側面にもたらす影響を明らかにすることが可能となる。加害者が関係維持を意図し

て謝罪を行っているならば, ここで得られる情報は, 対人葛藤終結後の当事者間の人間関係を円滑なものにする上で役立つと思われる。

本研究の主な目的は以下の3つである。第1の目的は対人葛藤場面における謝罪の生起頻度を明らかにすること, 第2の目的は親密性によって幼児が用いる謝罪の種類に違いが見られるかを検討すること, そして第3の目的は, 謝罪の種類と謝罪後の被害者との人間関係の捉え方の組み合わせによる4つの幼児の行動タイプが, 親密性によって異なるかを明らかにすることである。

対人葛藤場面で用いられる幼児の問題解決方略は, 年齢が高くなるにつれて自己中心的なものが減少していき(山本, 1995a), 逆に謝罪のような協調的方略が増加していくと考えられる。したがって, 謝罪の生起頻度は加齢に伴って高くなることが予測される(仮説1)。親密性と謝罪の種類との関連に関する仮説は以下の通りである。真の謝罪の構成要素である罪悪感の認識は, 親しい他者との間で対人葛藤が生じた際により喚起される(Baumeister, Reis, & Delespaul, 1995)。したがって, 親密性の高い相手には真の謝罪を用い, 一方親密性の低い相手には道具的謝罪を用いる幼児が多いであろうことが予測される(仮説2)。最後に, 謝罪の種類と謝罪後の人間関係の捉え方による4つの行動タイプに親密性が及ぼす影響について以下の仮説が立てられた。幼児は親密な関係にある他者に対してより好意的な行動を示す(原, 1995)。このことと親密性は罪悪感を高める重要な要因であること(Baumeister et al., 1995)を併せて考えると, 幼児は親密性の高い相手には真の謝罪をし謝罪後の人間関係を維持したいと考えていることが予測される。一方, 親密性の低い相手には, 好意的な見解が生じず, またそれほど高い罪悪感も喚起されないため, 幼児は親密性の低い相手には道具的謝罪をし謝罪後は人間関係を維持したくないと考えていることが予測される(仮説3)。

予備観察および予備調査 本実験で用いる道具的謝罪内容を決定し, また本実験で用いる課題文と実験材料を決定するために4歳児から6歳児を対象として予備観察および予備調査を行った。

ものの取り合い場面では, 先有権を主張した側がより優位な立場に立つことができ(倉持, 1992), ものを取られた被害者が先有権を主張することによって, 加害者に非があるという立場がより明確になる。したがって, ものの取り合い場面は他の対人葛藤場面に比べてより謝罪が生起されやすい状況であることが予測され

る。予備観察の結果、幼児の対人葛藤として、ものの取り合い(39%)、身体接触(35%)、遊びにおけるルール違反(7%)、創作物の破壊(5%)、その他(14%)がみられた。ものの取り合いは他の対人葛藤に比べて生起頻度が高く、また4歳児から6歳児にわたる全ての年齢児において多く観察された対人葛藤であったため、本研究では対人葛藤場面としてももの取り合い場面を用いることにする。

幼児の謝罪としては、保育者からの罰を回避するための謝罪(58%)、自発的な謝罪(32%)、被害者の要求による謝罪(10%)が見られ、保育者からの罰を回避するための謝罪の生起頻度が最も高かった。罰への脅威は、謝罪を生起させる重要な要因であることから(Itoi et al., 1996)、本研究では、道具的謝罪として保育者からの罰を回避するための謝罪を用いることにする。

保育者による罰を回避するための道具的謝罪と真の謝罪の様子を描いた図版が各謝罪内容を表したものとして理解されているかを確かめるため、幼児10名を対象として予備調査を行った。具体的には、道具的謝罪と真の謝罪を描いた図版を各1枚提示し、図版に描かれている2人の子どもが引き起こしたものの取り合いについてのお話をした後、『先生が見ているので、先生に叱られたら嫌だから謝ろう』と思って謝っているのはどちらかな?、『お友達のおもちゃをとって悪いことしたな』と思って謝っているのはどちらかな?』と尋ね、各説明に対応する図版を選択するよう求めた。その結果、全ての幼児が道具的謝罪の図版については道具的謝罪の説明を、真の謝罪の図版については真の謝罪の説明を反映していると回答した。そこでこれらの課題文、図版、各謝罪についての説明文を本実験で用いることとした。

本 実 験

方法

被験児：被験児は、H市内にあるH保育園、H市内にあるD保育園に通う4歳児60名(平均年齢4歳2ヶ月、男児25名、女児35名)、5歳児65名(平均年齢5歳0ヶ月、男児30名、女児35名)、6歳児63名(平均年齢6歳4ヶ月、男児30名、女児33名)であった。

調査期間：2001年9月から11月。

材料：幼児が遊びの中で用いているおもちゃの絵10枚(赤ボール、青ボール、絵本、ブロック、車のおもちゃ、ままごとセット、なわとび、人形、ロボット、砂場の遊具)、指人形12体(男児用6体、女児用6体)、謝罪理由(道具的謝罪、真の謝罪)を表す図版4枚(男児用2枚、女児用2枚)。

教示文：実験前に、「これから指人形を使ってお話をするのでよく見ていてください。お話の中には、あつくん(ともくん)とまあくん(ゆうくん)という2人の子が出てきます。〇〇くん(被験児の名前)は、あつくん(ともくん)の気持ちになってお話を聞いてね。お話の後に、あつくん(ともくん)のことについてききます。〇〇くんはあつくん(ともくん)の気持ちになって答えてください。当たっている答えや間違っている答えはないので、〇〇くんが思ったことを教えてね。」と被験児に教示した。

課題文：「まあくん(被害者)が部屋でおもちゃで遊んでいる。そこへあつくん(加害者)がやってきてまあくんに『おもちゃを貸して』と言った。しかし、まあくんはまだおもちゃで遊びたかったので、あつくんにおもちゃを貸さなかった。すると、あつくんはまあくんのおもちゃを取りあげて持って行ってしまった。まあくんは返して欲しいと言ったが、あつくんは返さなかった。まあくんは泣き出してしまった。」という、ものの取り合い場面についてのお話。

なお、あつくん(ともくん)、まあくん(ゆうくん)という登場人物が出てくる教示文および課題文は男児についてのものであり、女児に対しては、登場人物の名前をあつちゃん(ともちゃん)、まあちゃん(ゆうちゃん)に変えて教示文および課題文を提示した。

ものの取り合い場面における加害者の行動予測 まず、10枚のおもちゃの絵の中から、好きなおもちゃが描かれた絵を2枚選択するよう被験児に求めた。その後上記の教示を行い、被験児が選択した2つのおもちゃの絵のうち1つを用いて、そのおもちゃを2人の登場人物が取り合う話を指人形2体を用いて実験者が演じた。課題文提示後、ものの取り合い後に幼児が自発的に謝罪するかを明らかにするために、「あつくんはこの後どうするかな?」と質問し、加害者の行動を予測させた。なお、課題文の内容を被験児が理解しているかを確認するため、課題文の提示後、「今のお話はどんなお話だったか覚えている?」と尋ね、課題文の内容を繰り返すよう求めた。

親密性による謝罪の種類および謝罪後の人間関係の捉え方の違い 予め被験児を、お話に出てくるともくん(加害者)とゆうくん(被害者)の関係が親密であると教示する高親密群と、ともくんとゆうくんの関係が親密でないと教示する低親密群の2群に振り分けた。

先に使用したものは別の指人形2体を見せて上述の教示文を提示した後、お話の登場人物であるともくん(加害者)とゆうくん(被害者)の親密性について以下

の教示を与えた。高親密群には、「ともくんとゆうくんはいつも一緒に遊んでいる大好きなお友達である」と、低親密群には、「ともくんとゆうくんはいつも全く一緒に遊ばない、仲良しじゃない2人である」と教示した。その後、先ほど被験児が選択した2つのおもちゃの絵のうち残りの絵を用いて、そのおもちゃを2人の登場人物が取り合う話を指人形2体を用いて実験者が演じた。課題文提示後、「このとき、ともくんはゆうくんにごめんなさいしたんだって」と、加害者が被害者に謝罪したという1文を挿入した。その後、親密性についての被験児の理解を確認するために「ともくんとゆうくんは仲良しだったかな？仲良しじゃなかったかな？」と質問し、また同様に、「今のお話はどんなお話だったか覚えてる？」と尋ね、課題文を繰り返すよう求めることで、被験児が課題文を理解しているかを確認した。

続いて、ものの取り合い場面で幼児が真の謝罪と道具的謝罪のどちらを用いるかをみるために、「ともくんは、仲良しの(仲良しでない)ゆうくんにどうして謝ったと思う？」と尋ね、2種類の謝罪の様子を描いた2枚の図版を提示し、「先生が見ているので、先生に叱られたら嫌だから謝ろうと思って謝った(道具的謝罪)」(FIGURE 1)、もしくは「おもちゃを取ってしまってゆうくんが悪いことしたなと思って謝った(真の謝罪)」(FIGURE 2)のいずれかの図版を選択するよう求めた。その後、「どうしてそう思ったのかな？」とその理由を尋ねた。2枚の図版の提示順序はランダムであった。

最後に、謝罪後の被害者との関係をどのように捉えているかを検討するために、謝罪後の加害者の行動について、「ともくんは、仲良しの(仲良しでない)ゆうくんに謝った後、ゆうくと遊ぶかな？遊ばないかな？」と、2つの行動のうちどちらか一方を選択する形で回答を求め、「どうしてそう思ったのかな？」とその理由

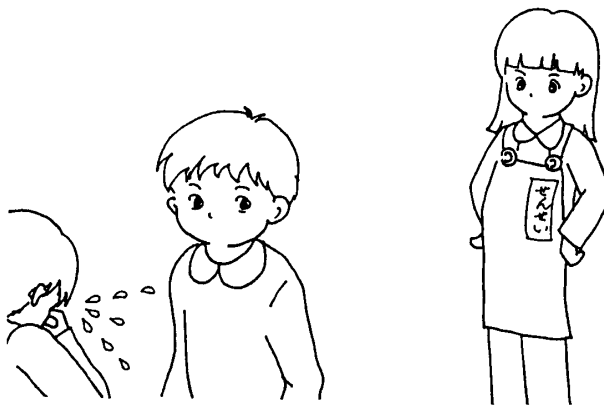


FIGURE 1 実験で用いた道具的謝罪の図版 (男児用)



FIGURE 2 実験で用いた真の謝罪の図版 (男児用)

を質問した。

課題文および教示文の理解を確認した結果、被験児1名(5歳男児1名)は課題文と親密性についての教示内容を理解できなかったため分析の対象から外した。また、図版選択後に被験児に答えるよう求めた選択理由は、被験児が図版を選択した際、課題内容や教示内容に基づいて回答を行っているかを確認するためのものであった。その結果、4歳児の60%、5歳児の78%、6歳児の84%が課題文や教示内容に基づいた回答を行っていた。それ以外の者は「分からない」もしくは「無回答」であったが、特に4歳児の場合、自由回答で選択理由が述べられるほど言語的能力が高くなく、選択理由があったとしてもそれを十分に実験者に伝えることができなかつた可能性が高い。上記の1名を除き、全ての被験児が課題文および教示内容を正しく理解していたことから、実験内容を正確に把握しているものとみなし、上記の1名を除く全ての被験児を分析対象とした。したがって、最終的に分析の対象となった被験児は、4歳児60名(男児25名、女児35名)、5歳児64名(男29名、女児35名)、6歳児63名(男児30名、女児33名)であった。

結 果

1. ものの取り合い場面における加害者の行動予測

年齢によって、ものの取り合い後の謝罪の生起頻度が異なるかを検討するために、ものの取り合い後の加害者の行動を予測させ、結果を4つのカテゴリー(謝罪、返却、わからない、その他)に分類した(TABLE 1)。4つのカテゴリーにおける年齢による人数の偏りを χ^2 検定したところ、有意な人数の偏りが見られた($\chi^2(6)=27.41$, $p<.01$)。残差分析の結果、6歳児に比べて4歳児は、「分からない」、もしくは持って帰る、知らんぷりするなど

TABLE 1 年齢による謝罪の生起の違い

	4歳児	5歳児	6歳児
謝罪	12(20)	27(42)	36(57)
返却	10(17)	15(23)	12(19)
分からない	15(25)	5(8)	3(5)
その他	23(38)	17(27)	12(19)
計	60(100)	64(100)	63(100)

()内は%

の「その他」の方略を用いると回答する幼児が有意に多かった。一方、4歳児に比べて6歳児では「謝罪する」と回答した幼児が多かった。

2. 年齢と親密性による謝罪の種類の違い

年齢と親密性によって幼児が用いる謝罪の種類が異なるかを検討するために逆正弦変換法による分散分析を行った (TABLE 2)。

道具的謝罪に関しては、年齢と親密性の交互作用が有意であった ($\chi^2(2) = 6.12, p < .05$)。単純主効果の検定を行ったところ、高親密群における年齢の主効果に有意傾向が見られた ($\chi^2(2) = 5.38, p < .10$)。ライアン法による多重比較を行ったところ、4歳児と6歳児の間で有意差がみられ ($\chi^2(1) = 5.05, p < .05$)、親密性の高い相手に道具的に謝罪するのは、6歳児に比べて4歳児の方が多ことが示された。低親密群については有意な年齢の主効果はみられなかった。また、親密性の単純主効果を検討したところ、6歳児において有意傾向が見られ ($\chi^2(1) = 3.43, p < .10$)、6歳児は親密性の高い相手よりも低い相手に対して道具的謝罪を用いる傾向があることが示された。4、5歳児に関しては親密性の単純主効果は見られなかった。

真の謝罪に関しても、年齢と親密性の交互作用が有意であった ($\chi^2(2) = 6.13, p < .05$)。単純主効果の検定を行ったところ、高親密群における年齢の主効果に有意傾向が見られた ($\chi^2(2) = 5.38, p < .10$)。ライアン法による多重比較を行ったところ、4歳児と6歳児の間で有意差がみられ ($\chi^2(1) = 5.06, p < .05$)、親密性の高い相手に真の謝罪を行うのは、4歳児よりも6歳児が多いことが示された。低親密群については有意な年齢の主効果はみられなかった。さらに、親密性の単純主効果について検討したところ、6歳児において有意傾向が見られ ($\chi^2(1) = 3.44, p < .10$)、6歳児は、親密性の低い相手により、高い相手に対して真の謝罪を多く用いる傾向があることが分かった。4、5歳児に関しては親密性の単純主効果は見られなかった。

3. 年齢と親密性による行動タイプの違い

謝罪の種類と謝罪後の行動予測についての回答に基づいて、被験児を以下の4つの行動タイプに分類した (TABLE 3)。第1のタイプは、道具的に謝罪し謝罪後被害者と遊ぶ、第2のタイプは、道具的に謝罪し謝罪後被害者と遊ばない、第3のタイプは、真の謝罪をし謝罪後被害者と遊ぶ、そして第4のタイプは、真の謝罪をし謝罪後被害者と遊ばないである。年齢と親密性によって、行動タイプに人数の偏りが見られるかを逆正弦変換法による分散分析によって検討した。

①タイプ1 (道具的謝罪をし謝罪後被害者と遊ぶ)

タイプ1に関しては、年齢と親密性の交互作用が有意であった ($\chi^2(2) = 12.76, p < .01$)。単純主効果の検定を行ったところ、高親密群における年齢の主効果が有意であった ($\chi^2(2) = 11.26, p < .01$)。ライアン法による多重

TABLE 2 年齢と親密性による謝罪の種類の違いと逆正弦変換法による分散分析の結果

	4歳児		5歳児		6歳児		逆正弦変換法による分散分析結果 (χ^2)		
	高親密	低親密	高親密	低親密	高親密	低親密	A(年齢の主効果)	B(親密性の主効果)	A×Bの交互作用
道具的謝罪	15(50)	9(30)	13(42)	13(39)	7(23)	15(45)	0.78	0.00	6.12*
真の謝罪	15(50)	21(70)	18(58)	20(61)	23(77)	18(55)	0.78	0.00	6.13*

()内は%

*p<.05

TABLE 3 年齢と親密性による行動タイプの違いと逆正弦変換法による分散分析の結果

	4歳児		5歳児		6歳児		逆正弦変換法による分散分析結果 (χ^2)		
	高親密	低親密	高親密	低親密	高親密	低親密	A(年齢の主効果)	B(親密性の主効果)	A×Bの交互作用
タイプ1 (道具的謝罪—遊ぶ)	15(50)	6(20)	12(39)	9(27)	4(13)	13(39)	1.41	.38	12.76**
タイプ2 (道具的謝罪—遊ばない)	0(0)	3(10)	1(3)	4(12)	3(10)	2(6)	.87	2.33	3.26
タイプ3 (真の謝罪—遊ぶ)	12(40)	15(50)	18(58)	13(39)	22(73)	15(45)	2.98	2.93*	5.05*
タイプ4 (真の謝罪—遊ばない)	3(10)	6(20)	0(0)	7(21)	1(3)	3(9)	2.95	8.85**	2.73

()内は%

**p<.01, *p<.1

比較を行ったところ、4歳児と6歳児 ($\chi^2(1)=10.56, p<.01$), 5歳児と6歳児 ($\chi^2(1)=5.52, p<.05$) の間に有意差が見られ、タイプ1の行動を示す幼児は、4歳児、5歳児の方が6歳児に比べて多いことが示された。低親密群については有意な年齢の主効果は見られなかった。続いて、親密性の単純主効果を検討したところ、4歳児 ($\chi^2(1)=6.41, p<.05$) と6歳児 ($\chi^2(1)=5.82, p<.05$) において有意差が得られた。4歳児は親密性の高い相手に、6歳児は親密性の低い相手にタイプ1の行動をとることが示された。5歳児に関しては親密性の単純主効果は見られなかった。

②タイプ2 (道具的謝罪をし謝罪後被害者と遊ばない)

タイプ2に関しては、年齢、親密性に関する主効果、交互作用ともに有意ではなかった。

③タイプ3 (真の謝罪をし謝罪後被害者と遊ぶ)

タイプ3に関しては、親密性の主効果が有意傾向であった ($\chi^2(1)=2.93, p<.10$)。ライアン法による多重比較を行ったところ、タイプ3の行動を示す幼児は、低親密群に比べて高親密群の方が有意に多かった。また、年齢と親密性の交互作用に有意傾向が見られた ($\chi^2(2)=5.05, p<.10$)。年齢の単純主効果を検討したところ、高親密群において有意差が得られた ($\chi^2(2)=7.33, p<.05$)。ライアン法による多重比較を行ったところ、4歳児に比べて6歳児の方が、タイプ3の行動を示す幼児が多いことが示された ($\chi^2(1)=7.32, p<.05$)。低親密群については有意な年齢の主効果は見られなかった。さらに、親密性の単純主効果を検討したところ、6歳児において有意差が得られ ($\chi^2(1)=5.16, p<.05$)、6歳児は親密性の低い相手に対してよりも親密性の高い相手に対してタイプ3の行動をとることが示された。4、5歳児に関しては親密性の単純主効果は見られなかった。

④タイプ4 (真の謝罪をし謝罪後被害者と遊ばない)

タイプ4に関しては、親密性の主効果が有意であり ($\chi^2(1)=8.85, p<.01$)、幼児は親密性の高い相手に対してよりも低い相手に対してタイプ4の行動を示すことが分かった。

考 察

本研究の目的は、幼児の謝罪行動が親密性とどのように関連しているか、またそれは年齢によってどのように異なるかを明らかにすることであった。その結果、親密性によって謝罪を使い分けるのは、6歳児になってからであるということが示された。すなわち、4歳児は親密性の高い相手にも道具的謝罪を行うのに対し、6歳児になると親密性の高い相手には真の謝罪を、親

密性の低い相手には道具的謝罪を用いることが明らかにされた。さらに、4歳児は親密性の高い相手に対して謝罪後も関係を維持したいと考えていても用いる謝罪は道具的謝罪である一方、6歳児は親密性の高い相手とも低い相手とも謝罪後人間関係を維持したいと考えているが、その際、親密性の高い相手には真の謝罪を、親密性の低い相手には道具的謝罪を用いることが示された。以上のことから、親密性は幼児の謝罪行動に影響することが示された。

ものの取り合い場面における加害者の行動予測 年齢によって対人葛藤場面における謝罪の生起頻度に違いが見られるかを検討したところ、4歳児よりも6歳児の方が謝罪の生起頻度が高いことが示された。したがって、加齢に伴って謝罪の生起頻度は高くなるであろうという仮説1は支持された。

本研究では明らかに加害者が悪い状況についての課題文を提示し、被験児には加害者の立場に立つよう求めた。違反を犯した加害者の立場が明白であったにもかかわらず、4歳児においては謝罪すると回答した幼児は少なく、「とったおもちゃを持って帰る」などの自己欲求に基づいた回答が多く見られた。この結果は、低年齢児は自己中心的な問題解決方略を多く用いるという山本(1995a)を支持するものであった。このような自己中心的な方略は問題解決に結びつきにくいだけでなく、当事者の関係をより一層悪化させる可能性がある。それにもかかわらず、4歳児が謝罪よりも自己中心的な方略を多く用いるのは、彼らがこれらの方略以上に謝罪が葛藤終結にとって有効であることを認識していないからであろう。それに対し、6歳児では謝罪するという回答が多く見られた。6歳児は4歳児に比べて対人葛藤や問題解決の経験が豊富であることから、様々な方略の中から葛藤終結に最も有効である謝罪を用いることを選択した可能性が高い。つまり、4歳児と6歳児の間で謝罪生起頻度に違いが見られる理由の1つは、対人葛藤や問題解決についての彼らの経験の違い、もしくは葛藤終結に有効な方略についての認識の違いにあると考えられる。

4歳児と6歳児の間で謝罪生起頻度が異なるもう1つの理由は、彼らが謝罪スクリプトを確立しているかにあると思われる。Darby & Schlenker (1989) は、被害者と加害者の間には謝罪—許容スクリプトが確立されていることを示唆している。謝罪—許容スクリプトとは、違反を犯した加害者は被害者に謝罪しなければならず、謝罪を受けた被害者は加害者を許容しなくてはならないというものである。4歳児ではまだ謝罪ス

クリプトが確立されていないため、違反を犯したとしても被害者に謝罪しない幼児が多いのかもしれない。しかしながら、6歳児になると謝罪スクリプトが確立され、それが高い謝罪の生起頻度に結びついた可能性が高い。幼児における謝罪—許容スクリプトに関してはこれまでほとんど明らかにされてきておらず、この点についてはさらに詳しく検討していく必要がある。

年齢と親密性による謝罪の種類の違い 年齢および親密性が幼児の用いる謝罪に影響するかを検討したところ、4歳児では6歳児に比べて、親密性の高い相手に道具的謝罪を用いると答える者が多いことから、違反を犯した相手が親しい他者であったとしても、真の謝罪ではなく「保育者による罰を回避する」という目的を達成するために道具的に謝罪する者が多いことが分かった。一方、6歳児では親密性の高い相手には真の謝罪を、低い相手には道具的謝罪を用いると回答する者が多かった。このことから、幼児は親密性の高い相手には真の謝罪を、親密性の低い相手には道具的謝罪を用いるであろうという仮説2は、6歳児においてのみ支持された。

このような年齢による違いが見られた理由として以下のことが考えられる。道具的謝罪とは異なり、真の謝罪を行うには加害者は被害者に対して罪悪感を認識する必要がある。罪悪感の認識は他者視点取得能力と密接に関連しており(Hoffman, 1998)、他者の視点に立って他者の感情や状況を認識しなければ、他者に対して罪悪感を認識することは難しい。本研究で用いた課題文のような、他者からおもちゃを取りあげたという状況情報から被害者の感情を推論することは年中児以下の幼児には困難である(笹屋, 1997)。そうだとすれば、4歳児が親しい他者に対して真の謝罪を行わなかったのは、たとえ被害者が親しい他者であったとしても、4歳児が被害者のネガティブな感情を推論することができず、そのために被害者に対して罪悪感を認識することが困難であったことによるものであるといえよう。つまり、4歳児の謝罪に真の謝罪が含まれている可能性は低く、違反後謝罪しないよりはした方がよいという判断のもと(Wellman et al., 1979)、一応の形式的な道具的謝罪をするのが4歳児の段階であるといえる。一方6歳児になると、自分が犯した違反のために被害者がネガティブな感情を抱いていることを理解し、被害者に対して罪悪感を認識した上で真の謝罪をすることが可能となる。親密性は罪悪感の認識を高める一因であることから(Baumeister et al., 1995)、6歳児は親密性の低い相手よりも高い相手に対してより高い罪悪感を

喚起させ、そのため、彼らは親密性の高い相手に真の謝罪を行うようになると考えられる。しかしながら、親密性の低い相手に対しては罪悪感をあまり認識しないため、真の謝罪ではなく道具的謝罪を行うのであろう。このように、6歳児になると4歳児とは異なり、他者感情推論に基づいて被害者に対して罪悪感を認識することができるようになるため、真の謝罪を行うことが可能になると考えられる。つまり、被害者との親密性によって用いる謝罪を使い分けるようになるのは6歳児になってからであることが示された。

年齢と親密性による行動タイプの違い 続いて、親密性によって幼児の行動のタイプ(道具的謝罪後遊ぶ、道具的謝罪後遊ばない、真の謝罪後遊ぶ、真の謝罪後遊ばない)が異なるかを検討した。その結果、4歳児は親密性の高い相手には、道具的謝罪をして謝罪後遊ぶと考えているが、6歳児になると道具的謝罪をして謝罪後遊ぶのは親密性の低い相手に限られ、親密性の高い相手には真の謝罪をして謝罪後遊ぶと考えていることが分かった。したがって、幼児は親密性の高い相手とは真の謝罪後遊ぶと考え、親密性の低い相手とは道具的謝罪後遊ばないと考えているであろうという仮説3は、6歳児の高親密群においてのみ支持された。

松永(1993)によると、幼児は相手との人間関係を維持するために謝罪することがある。本研究において、謝罪後に「遊ぶ」と回答した幼児については、謝罪を人間関係を維持するための手段の1つとして捉えていることによるものと考えられる。原(1995)は、友だちとは親密で相互作用的な二者関係にある他者であるとした上で、遊び場面では、幼児は知っている子に比べ友だちに対してより好意的な行動を示すことを明らかにした。他者が仲間入り行動や遊びの提案を示すとき、その他者が知っている子である場合に比べて友だちの場合には、その子の仲間入り行動や遊びの提案を受容するという。このことは、幼児が親密な他者とは遊びを通して相互作用や関係の維持、持続をはかろうとしていることを示している。本研究において、親密性の高い他者に対して、謝罪後「遊ぶ」という回答が6歳児だけでなく4歳児においても多く見られたのは、彼らが謝罪後、親密性の高い他者との遊びや人間関係の維持をはかろうとしていることを示唆しており、謝罪はその手段であると考えられる。

このように、6歳児だけでなく4歳児も謝罪後親密性の高い被害者との関係を維持したいと考えていたが、4歳児と6歳ではそのときに用いる謝罪の種類が異なっていた。すなわち、4歳児では、親密性の高い被

害者に対して人間関係を維持したいと考えていても形式的な道具的謝罪を用いるというタイプ1が多く、一方6歳児では、親密性の高い被害者に対して人間関係を維持したいと考え真の謝罪を用いるというタイプ3が多かった。4歳児と6歳児の間に、このように用いる謝罪の種類に違いが見られる第1の理由は、先述したように、6歳児に比べて4歳児が被害者の感情を十分に理解することができないことにあると考えられる。4歳児は、たとえ被害者が親密性の高い他者であったとしても、被害者の感情を理解することができず罪悪感を認識しないため、被害者と人間関係を維持したいと思ったとしても用いる謝罪が道具的なものになる。それに対し6歳児は、親密性の高い相手と謝罪後も人間関係を維持するには、被害者が抱いた不快感やネガティブな感情を理解し罪悪感を認識した上で真の謝罪をする必要があると考えている。このように、被害者の立場に立って被害者の感情を理解できるか否かが、親密性の高い相手に対する4歳児と6歳児の謝罪の種類の違いを生み出すと考えられる。

4歳児と6歳児の間で謝罪の種類の違いが見られる第2の理由は、親密性の高い相手から許容を得ることについての4歳児と6歳児の認識の違いにあると考えられる。親密性の高い被害者と謝罪後も人間関係を維持するためには、被害者から許しを得ることが前提となる。被害者の許しを得るためには、「ごめん」という言語表現のみのおごなりの謝罪よりも、「ごめんなさい。悪いことをしました。何かお手伝いできることはありませんか。」という、責任の受容や補償行動を含む手の込んだ謝罪を行う方が効果的であり (Darby & Schlenker, 1982), さらに加害者は親密性の高い被害者からは許しを得やすいという McCullough et al. (1998) の見解から、6歳児は親密性の高い相手に許容されるためには真の謝罪が必要であると考えている可能性が高い。一方、4歳児は、関係を維持したい親密性の高い相手にてさえ道具的謝罪を行うと回答する者が多いことから、どのような種類のものでも謝罪をすることによって許しを得られると考えている可能性がある。このような許容を得ることに対する4歳児と6歳児の認識の違いが、彼らの用いる謝罪の種類に反映されたと考えられる。

また、6歳児の低親密性群では、関係を維持したいと考え道具的謝罪を行うというタイプ1が多くみられた。これは、謝罪後の当事者間の関係が良好なまま保たれるのは、被害者が謝罪のもたらすポジティブな効果を認識しているからだけではなく (Bennett & Earwa-

ker, 1994; Darby & Schlenker, 1982), 謝罪を行う加害者が被害者との関係を維持したいという前向きな考えを持っているからであることを示唆する結果である。しかしながら、その際の謝罪は道具的なものであり、その道具的謝罪には被害者に対する罪悪感の認識は含まれていない。6歳児は、違反を犯した他者の感情を理解することが可能であり、被害者に対して罪悪感を認識することができるはずである。それにもかかわらず、道具的謝罪を用いると回答する者が多いという結果は、6歳児にとって、親密性は加害者における謝罪後の被害者との人間関係の捉え方を決定する要因ではなく、用いる謝罪の種類を決定する重要な要因であることを示している。

最後に、タイプ4に関して親密性の主効果がみられたことから、幼児は被害者との親密性が高い場合に比べて低い場合、真の謝罪をして謝罪後遊ばないと考えていることが分かった。自己の欲求に従って用いられる自己中心的な方略と比べ、真の謝罪には責任の受容や罪悪感の認識が含まれるため、加害者側にかかる心理的コストが大きい。幼児は親密性の低い相手を、それほどのコストに見合う存在ではないと捉えているのかもしれない。すなわち、真の謝罪をしたとしても、今後このような負担を被ることがないように、被害者との関係そのものを断ってしまう可能性が考えられる。この点に関しては、今後更なる検討が求められる。

対人葛藤は、とりわけ幼児期においては、社会性を身に付けるという意味において重要な役割を果たしており (Shantz, 1987), 幼児は様々な情報を手掛かりに用いる解決方略を決定していく (山本, 1995b)。多くの問題解決方略の中でも、謝罪行動は加害者にもたらす利益が大きく、また当事者間の人間関係を修復するための最も有効な方略である。たくさんの対人葛藤を経験する中で、幼児は謝罪がポジティブな効果を持つことを認識するだけでなく、被害者との人間関係によっては、ただ道具的に謝罪するのではなく、責任の受容や罪悪感の認識を含む真の謝罪が求められることを学習する。すなわち、謝罪行動とは違反を犯した加害者が行わなければならない慣習的行動であり、加齢に伴ってその内容も重視されるようになるといえる。

道具的謝罪とは、その場を切り抜いたり罰を回避することを目的として行われるものであり、真の謝罪に比べると謝罪としての意味を見出しにくい (Tavuchis, 1991)。また、被害者の不快な感情を理解せず、罪悪感を抱くことなく道具的に謝罪した場合、なぜ被害者が不快感を抱いているかに考えが及ばないため、再び同

じ違反が繰り返される危険性が高い。本研究では、親密性の高い相手にさえ、4歳児の多くが道具的謝罪を用いることが示された。道具的謝罪ではなく真の謝罪にこそ意味があることを幼児に認識させるには、対人葛藤場面での幼児自身の経験に依拠するだけでなく、保育者が真の謝罪の重要性を積極的に教示しなければならない。乳幼児期は、子ども同士の対人葛藤に教師の介入が多く見られる時期である(加用, 1981)。この時期に、社会的慣習行動としての謝罪の価値だけではなく、真の謝罪の重要性や必要性を教示することによって、幼児の真の謝罪についての理解は深まり、そのことがより円滑な対人葛藤終結につながると思われる。

今後の課題

本研究では、謝罪の種類を決定する要因として親密性を取り上げた。しかしながら、謝罪行動に影響を与える要因は親密性以外にも多い。例えば、加害者が負うべき責任の高さと被害の大きさである。従来の研究の多くは、この2つの状況要因を操作し、どのような状況において謝罪の効果が最も得られやすいかについて検討している(e.g., Darby & Schlenker, 1982; Darby & Schlenker, 1989)。これらの要因は、謝罪の効果を左右するだけではなく、謝罪の種類を決定する要因となる可能性が高い。

謝罪を行う目的の1つは、被害者から許しを得ることである。Bennett & Dewberry (1994)によると、親密性の高い被害者に謝罪を拒絶されるとき、加害者は被害者に対してより大きな怒りの感情を抱く。本研究で6歳児において示されたように、親密性が高い相手だからこそ真の謝罪をしたにもかかわらず、それだけのコストに見合う反応が返されなかったとき、被害者と加害者の関係がさらに悪化する可能性がある。幼児同士の対人葛藤場面において、謝罪をした加害者を被害者が許容しなかったときに見られる、「謝ったんだからいいじゃん」「許してくれないと先生に言うよ」といった発言は、そのことを表している。謝罪を行う目的に許容が含まれるならば、許容という観点も考慮して謝罪行動を検討する必要がある。

謝罪は、問題解決方略として最も有効なものであるにもかかわらず、幼児を対象とした研究はあまりなされていない。円滑な対人葛藤終結や違反の繰り返し防止に対して、特に真の謝罪が担う役割は大きい。幼児の謝罪について今後更なる研究を進めていきたい。

引用文献

- Barrett, K. C. 1998 The origins of guilt in early childhood. In J. Bybee (Ed.), *Guilt and children*. San Diego, CA: Academic Press. Pp.75-90.
- Baumeister, R. F., Reis, H. T., & Delespaul, P. A. E. G. 1995 Subjective and experiential correlates of guilt in daily life. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 1256-1268.
- Bennett, M., & Dewberry, C. 1994 "I've said I'm sorry, haven't I?" A study of the identity implications and constraints that apologies create for their recipients. *Current Psychology*, **13**, 10-20.
- Bennett, M., & Earwaker, D. 1994 Victims' responses to apologies: The effects of offender responsibility and offense severity. *Journal of Social Psychology*, **134**, 457-464.
- Browning, L., Davis, B., & Resta, V. 2000 What do you mean "Think before I act"?: Conflict resolution with choices. *Journal of Research in Childhood Education*, **14**, 232-238.
- Darby, B. W., & Schlenker, B. R. 1982 Children's reactions to apologies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 742-753.
- Darby, B. W., & Schlenker, B. R. 1989 Children's reactions to transgressions: Effects of the actor's apology, reputation and remorse. *British Journal of Social Psychology*, **28**, 353-364.
- Doyle, A., Connolly, J., & Rivest, L. 1980 The effect of playmate familiarity on the social interactions of young children. *Child Development*, **51**, 217-223.
- Eisenberg, N. 2000 Emotion, regulation, and moral development. *Annual Review of Psychology*, **51**, 665-697.
- Fukuno, M., & Ohbuchi, K. 1998 How effective are different accounts of harm-doing in softening victims' reactions? A scenario investigation of the effects of severity, relationship, and culture. *Asian Journal of Social Psychology*, **1**, 167-178.
- Gonzales, M. H., Pederson, J. H., Manning, D. J., & Wetter, D. W. 1990 Pardon my gaffe: Effects

- of sex, status, and consequence severity on accounts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 610-621.
- 原 孝成 1995 幼児における友だちの行動特性の理解—友だちの行動予測と意図— 心理学研究, **65**, 419-427. (Hara, T. 1995 Preschoolers' understanding of characteristics of their friends' behavior : Prediction of friends' behavior and behavioral intention toward friends. *Japanese Journal of Psychology*, **65**, 419-427.)
- Hoffman, M. L. 1998 Varieties of empathy-based guilt. In J. Bybee (Ed.), *Guilt and children*. San Diego, CA : Academic Press. Pp.91-112.
- Itoi, R., Ohbuchi, K., & Fukuno, M. 1996 A cross-cultural study of preference of accounts : Relationship closeness, harm severity, and motives of account making. *Journal of Applied Social Psychology*, **26**, 913-934.
- 加用文男 1981 幼児のケンカの心理学的分析 現代と保育, **7**, 176-189.
- 倉持清美 1992 幼稚園の中のものめぐり子ども同士のいざこざ—いざこざで使用される方略と子ども同士の関係— 発達心理学研究, **3**, 1-8.
- Lewis, M. 1998 Emotional competence and development. In D. Pushkar., W. M. Bukowski, A. E. Schwartzman, D. M. Stack, & D. R. White (Eds.), *Improving competence across the lifespan*. New York : Plenum. Pp.27-36.
- 松永あけみ 1993 子ども(幼児)の世界の謝罪 日本語学 明治書院, **12**, 84-93.
- McCullough, M. E., Rachal, K. C., Sandage, S. J., Worthington, E. L. Jr., Brown, S. W., & Hight, T. L. 1998 Interpersonal forgiving in close relationships : II. Theoretical elaboration and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1586-1603.
- Ohbuchi, K., Kameda, M., & Agarie, N. 1989 Apology as aggression control : Its role in mediating appraisal of and response to harm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 219-227.
- Petrucci, C. J. 2002 Apology in the criminal justice setting : Evidence for including apology as an additional component in the legal system. *Behavioral Sciences and the Law*, **20**, 337-362.
- 笹屋里絵 1997 表情および状況手掛りからの他者感情推測 教育心理学研究, **45**, 312-319. (Sasaya, R. 1997 Inferring others' emotion from facial and situational cues. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **45**, 312-319.)
- Shantz, C. U. 1987 Conflict between children. *Child Development*, **58**, 285-305.
- Schlenker, B. R., & Darby, B. W. 1981 The use of apologies in social predicaments. *Social Psychology Quarterly*, **44**, 271-278.
- Tavuchis, N. 1991 Mea culpa : A sociology of apology and reconciliation. Stanford, CA : Stanford University Press.
- Tedeschi, J., & Reiss, M. 1981 Verbal strategies in impression management. In C. Antarki (Ed.), *The psychology of ordinary explanation of social behaviour*. London : Academic Press. Pp. 271-309.
- Wellman, H. M., Larkey, C., & Somerville, S. C. 1979 The early development of moral criteria. *Child Development*, **50**, 869-873.
- 山本愛子 1995a 幼児の自己調整能力に関する発達の研究—幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略について— 教育心理学研究, **43**, 42-51. (Yamamoto, A. 1995 A developmental study of self-regulation in preschool children : The development of self-assertive strategy in interpersonal conflicts. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **43**, 42-51.)
- 山本愛子 1995b 幼児の自己主張と対人関係—対人葛藤場面における仲間との親密性および既知性— 心理学研究, **66**, 205-212. (Yamamoto, A. 1995 Effects of intimacy and familiarity on self-assertive strategy in interpersonal conflicts among preschool children. *Japanese Journal of Psychology*, **66**, 205-212.)

謝 辞

本論文は、広島大学大学院教育学研究科に提出した修士論文(2001年度)を一部加筆、修正したものです。実験および調査に御協力いただきました幼稚園、保育園の園児の皆様、先生方に深く感謝いたします。

(2003.5.2 受稿, '04.3.3 受理)

Intimacy and Apologies in Interpersonal Conflict Situations : Preschool Children

MIWA NAKAGAWA AND AKIRA YAMAZAKI (GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION, HIROSHIMA UNIVERSITY)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2004, 52, 159–169

The purpose of the study was to examine the relation between the type of apology offered by preschool children, viz., instrumental apologies and sincere apologies, and intimacy. The results suggested that intimacy had an influence on the type of apology used by the 6-year-olds. The 4-year-old children made instrumental apologies to children whom they were familiar with, whereas 6-year-old children gave instrumental apologies to children they were not familiar with, and sincere apologies to ones whom they knew. In addition, whether the children's apologies took account of their relationships after the apology was also examined. It was found that 4-year-old children wanted to maintain good relationships with children they were familiar with, and gave them instrumental apologies, whereas although 6-year-old children wanted to maintain good relations with others, whether or not they were familiar with them, they gave instrumental apologies to children whom they were not familiar with, and sincere apologies to those whom they knew.

Key Words : instrumental apology, sincere apology, intimacy, preschool children